ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨

である。それが、この男のほかには誰もいない。 みをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなもの羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨や丹塗の剥げた、大きな円 柱に、蟋 蟀が一匹とまっている。 広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々やみを待っていた。

りを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわその代りまた。鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼

いた。 いた。 いた。 いた。 いた。 の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、 こびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上 こびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上 がまり見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその に来るのである。――もっとも今日は、刻限が遅いせいか、 きり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、「啄み 夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっ

出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、 当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の 雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。 とめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる 何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして―― 下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いた 云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とり 人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、 雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下 実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が 下人が、永年、 ように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この ない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。 しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当ては 作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。 使われていた主人から、暇を出されたのも、

屋根が、斜につき出した、甍の先に、重たくうす暗い雲を支つめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあ

になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定する、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人とがは、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人とが、は、手段を選ばない。選んでいれば、築土の下か、道ばたのようにかる。違れない。選んでいれば、築土の下か、道ばたのとうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選えている。

てしまった。ける。丹塗の柱にとまっていた蟋・蟀も、もうどこかへ行っける。丹塗の柱にとまっていた蟋・蟀も、もうどこかへ行っる。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さであ下人は、大きな、嚔をして、それから、大儀そうに立上っ下人は、大きな、嚔をして、それから、大人ぎ

るだけの、勇気が出ずにいたのである。

と、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。する人目にかかる惧のない、一晩楽にねられそうな所があれば、の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗袗に重ねた、紺の襖

の一番下の段へふみかけた。ないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子りである。下人はそこで、腰にさげた聖・柄の太刀が鞘走らが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばか

の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めの光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅

アー・アンドではない。 この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、 アーに、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。 アーで、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、 で、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、 で、しから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。

恐る恐る、楼の内を覗いて見た。来るだけ、 平 にしながら、頸を出来るだけ、 前へ出して、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、どうせただの者ではない。

という事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるいので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、

そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間 ころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部 うに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上に 分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のよ

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩影を一層暗くしながら、永久に唖の如く黙っていた。 覚を奪ってしまったからだ。 れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅 た。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘

つ

り出していたのである。

ろう。 した松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむよう る人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に、蹲ってい に眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であ 猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をとも 暫ざ 時じ

「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時 た死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてい をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪

は、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、 一本ずつ抜けるのに従って、 下人の心から

は手に従って抜けるらしい。

心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上 の下でこの男が考えていた、饑死をするか盗人になるかと云増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門 う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もな く、饑死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。— ない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、 いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れ 一分毎に強さを

さっきまで自分が、 それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、 夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、 けてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の なかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づ 下人には、勿論、 盗人になる気でいた事なぞは、 何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわから とうに忘

ない。 上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から 大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでも れていたのである。

うに、飛び上った。 「おのれ、どこへ行く。」 老婆は、 一目下人を見ると、 まるで、弩にでも弾かれたよ

げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それで 下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃

こへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの も下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行か 無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわか すまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、 っている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそ しばらく、

「何をしていた。 云え。云わぬと、これだぞよ。」

腕である。

く燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後と ると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわし 明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてい 唖のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて ら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、 ような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、 をして居たのだか、それを己に話しさえすればいいのだ。」 ようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何 を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうし た時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、 に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就し 黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りなが 白い 鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は 下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。 「己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下 下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、 すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じ

> 時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の た。細い喉で、尖った喉、仏の動いているのが見える。その鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かし 耳へ伝わって来た。

うたのじゃ。 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、。鬘にしようと思

た長い抜け毛を持ったなり、蟇のつぶやくような声で、口ご通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪っ 失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しょ に、心の中へはいって来た。すると、その気色が、先方へも 下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして

その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしの どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯 のを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干した 饑死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、 にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事であろ。 も知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらい ていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、 ゃて、仕方がなくした事であろ。されば、今また、わしのし 女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、饑死をするのじ な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、 もりながら、こんな事を云った。 「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、 何ぼう悪い事か

老婆は、大体こんな意味の事を云った。する事も大目に見てくれるであろ。」

ば、饑死をする体なのだ。」「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなけれ「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなけれ老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の話が完ると、下人は、嘲るような声で念を押した。

な梯子を夜の底へかけ下りた。剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、

下人の行方は、誰も知らない。

下人の行方は、誰も知らない。
こんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。そうして、そこから、短い白髪を、倒。にして、門の下を覗きえている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老

(大正四年九月)